

# 江波山かげに



誇りあり 歓喜あり のぞみあり 江波小学校（平成19年6月14日号）

## 《運動会へのご協力・ご支援ありがとうございました》



6月3日（日）盛会のうちに今年度の運動会を終えることができました。保護者・地域の皆様のご協力とご支援に厚くお礼申し上げます。

1日（金）には、学校周辺の清掃などの環境整備をしていただきました。また、テント張りなど、会場設営にご協力いただきました。

運動会当日は、学校及び学校周辺の巡回をしながら不審者への警戒や自転車の管理などをしていただき、運動会の円滑な進行にご協力くださいました。

当日は、午後雨に見舞われ、進行の心配をいたしました。幸いにして軽い雨にとどまり予定通り終えることができました。しかしテントが濡れたため当日しまい込むことが出来ませんでした。止むを得ず、代休明けの5日（火）に収納作業を行いました。多数の保護者の皆様のご協力を得て短時間で収納することができました。

P T A 種目を実施につきましても、周到に計画をしていただきました。多くの皆様が楽しく参加され、親睦を深めていただくことができました。

何よりも、561名の児童全員が参加でき、地域・保護者の皆様の大きな声援を受けることができましたことを大変うれしく、またありがたく思っております。

ご多用の毎日にもかかわらず、事前の準備から当日の運営、事後の整理まで御協力をいただきましたことに心より感謝申し上げます。

子どもたちに必要な力をつけていくことが出来るよう、これからも全教職員が力を合わせて努力してまいります。

## 《マナーも良かったのでは》マナーは大人の生きる力です！

地域・保護者の方々の学校内でのマナーも向上しつつあるというのが、運動会終了後の保護者の皆様の感想です。テントの中や立見席では、譲り合って、気持ちの良い応援の姿が見られました。大変喜ばしいことでした。一方、数本のたばこの吸い殻が片づけた後の運動場に落ちていました。数本とはいえ、「これがなかったらなあ」という声が・・・。

## 《1年生の運動会》

開会式：1年生が元気いっぱい宣言してくれました。

はじめてのうんどうかい ときどきわくわくたのしみです  
げんきいっぱいの めざまし たいそうが だいすきです  
かけっこもたまいいも いっしょうけんめいがんばります  
おうえんしてください

入学からわずかに二月、1年生は、この言葉のとおり、ときどきながらも、走り、球を投げ、大きな声で歌い、兄さん姉さんを応援してくれました。すっかり江波っ子です。



# 大空にとどいた江波っ子パワー！

閉会式：6年生の進行係が、今年の運動会を見事にまとめてくれました。

ついに、運動会が終わりに近づいています。赤組も白組も、とてもはりきっていて、かっこよかったです。今回の運動会のテーマは、「大空にとどけ、江波っ子パワー」でした。ぼくたちのパワーは大空に十分とどいたと思います。

今回、1年生のみなさんは、初めての運動会でしたね。楽しかったですか。見ていて、とてもかわいらしかったし、かけっこも、玉入れも一生けん命がんばっていました。1年生だけでなく、2年生から6年生のみなさんも、一生けん命でした。

これまで、暑い中、練習もがんばってきました。できなかった動きも、いっぱい練習して、できるようになった人がたくさんいました。私たちは、その練習の成果が出せたと思います。

今年の運動会は、赤組が勝ったけど、白組もしっかりがんばったので、良いと思います。たくさんの人が見ている前では、きんちょうしたと思います。お母さん、お父さんたちの前で、がんばったところを見せられてよかったですね。この運動会は、とても心に残った運動会になりました。

## 《走ったよ！》

日曜日にうんどう会がありました。かいかいしきの、とき、わたしは、すっこくきんちょうしました。すると、かけっこの、でばんがきました。わたしは、でばんが、1ばんさいしょでした。すると、わたしは、「なんばんに、なるかな。」ときんちょうしました。

はしったしゅんかん、おばあちゃんたちが、「にちか」と、よびました。でもわたしが、はしっているから、おばあちゃんたちの声は、ぜんぜんきこえませんでした。おわたたあと、おかあさんが、「足はやかったね。」と、ほめてくれました。うれしかったです。

(2年生)



## 初夏の言葉

うまれたときはなし

徳島県 竹内紘子

るせえんだよお、勝手に産みやがって。がたがたぬかすな。ああしろ、こうしろってム力つくんだよお、ばばあ。

ちよつと、黙って聞いとつたら、ええかげん言いたい放題言うてくれるやないか。子どもつくるのは、小麦粉に砂糖入れて油であげてドーナツ作るのとは訳がちがうんじよ。産むっていうのは、命がけじよ。身体の中から命を出すんじや。体が裂けてメリメリいう。勝手に産みやがってなんてきいたふうなこというけんど、命がそないに簡単に創れるか。母さんになんちゅう口きくんじや。

ツッパリ兄ちゃんとおどおど母ちゃんを前に、教師は今日も怒鳴っている。

日本語の通じなくなった若者と、怒鳴りあう時は方言に限る。「るせえ」だの「ム力つく」だのわけのわからないコンビニ語にくらべりゃ方言は地の中から生まれた血の言語。根の深さ・濃さが違う。勝負するには千年早い。ほざくな、クソガキ。

言葉は本来、木や紙に残すためのものではなかったはずだ。口や体を通して伝えられるものだ。その地の土と光と空気の中で、目とぬくもりと雰囲気が媒介するものだ。

(以下略)

(日本方言詩集 川崎 洋 編 より)

